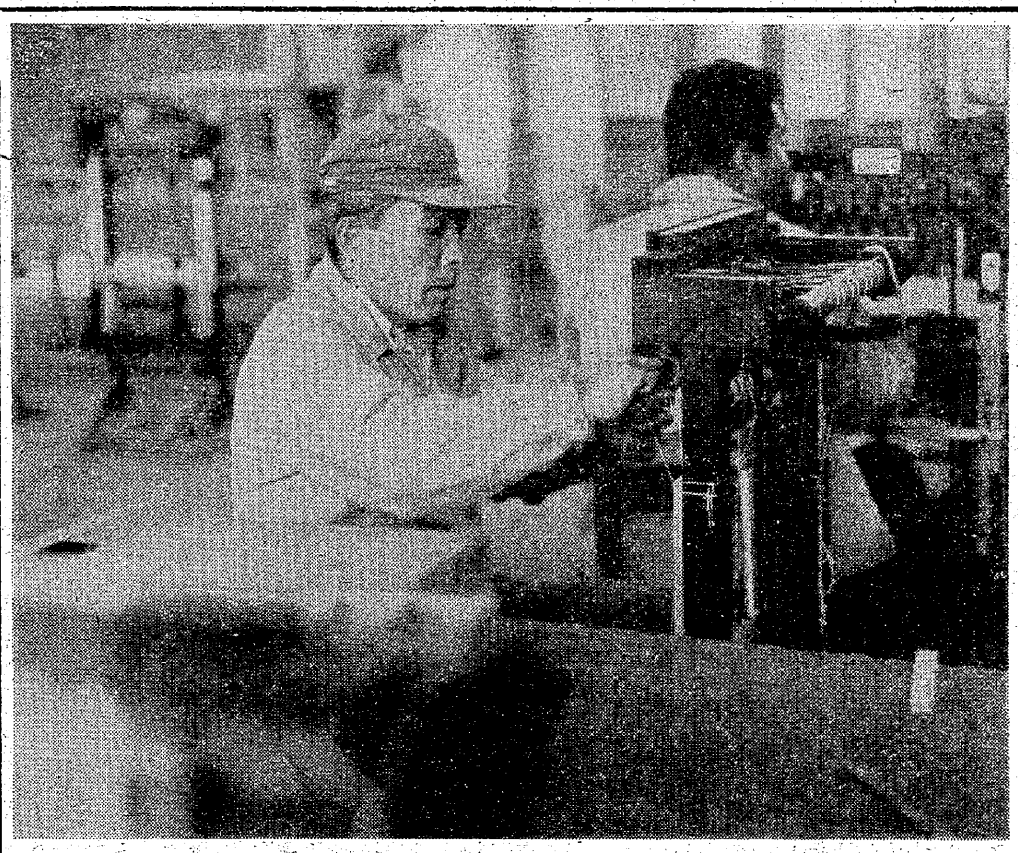
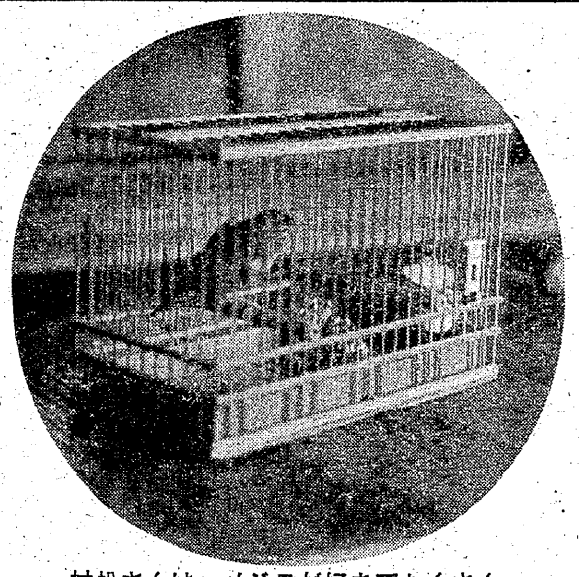
原告団

遺族・CO裁判、災害責任追求、特集号

第六十一号



上の写真は、ノリミス編み中の村松さん。
手もとの動きはもどかしいが、本人は真剣。



村松さんは、メジロが好きでたくさん飼つている，鳥籠はすべて手製，

原告団レポート

CO患者――
村松　進さん

人並みに生きた過去

――やがて世に出る子供達に、この証しを

三井に奪われた、妻と歩く道

言葉もなく

「とにかくCO患者の奥さんがご主人のCO患者をほったらかして蒸発してしまう話は少くなかです。また私は、その実例を知っております。ばってん、それはとがめられんことではなかですか。

考えて見てください、どだい夫婦の間の絆が切れてしまってからもう十二年。毎月、患者がもらって帰る給料はしれたもの。そのうえ何の理由もなく、ぶんなぐられたり蹴られたり。逃げ出したくなるのが人情ですよ。

かりにうちの女房が主人で、逆に私が女房でこやつの女房だったとしたら、私はとてもつとまらんじゃったですよ。ただ子どもかわいさから耐えてきてくれたわけでしょうが、女房はよく辛抱してくれました」

労災補償保険法にもとずき、かろうじて障害等級七級の年金を受給しながら、なお坑外職場で働いている村松進さん。

ある日、大牟田市新港町六番地三川鉱社宅三十五棟の住まいをたずねたときのこと、彼はこう言って、かたわらに座っていた妻のスミ子さんの方をチラリ。

スミ子さんは顔をうつむけたまま、ちょっと笑顔を見せただけだったが、はじめの言葉には、この夫婦がどろんこになりながら歩いてきた十二年という過去の、ズシリとした重さがあった。

悲しき爆発

述べるまでもなく、村松さんもあの三川鉱炭塵大爆発で被災した。昏睡状態で三井天領病院へかつぎこまれて以来、のがれようのないCO中毒症と格闘しながら生きることを余儀なくされた。今、坑外職場で働いているとはいえ、そこは三池労組が不屈なたたかいによってCO患者たちのために設けさせた、造成職場の一つの万田作業所。仕事は、炭鉱とはまったく縁のないノリミス編みなど。

そと目には普通人と変るところはないが、CO患者に共通して見られる症状は何でも持っている。もの忘れ、頭痛に吐き気、不眠やいらいら、激情、筋肉痛、性機能崩壊、内臓異常……など。眼科、歯科、内科と、今も同時に三つも四つもの病院に通院。

彼は、ある日の日記に書きしるしている。

「夕食後、子供達と入浴など。洗い場（社宅のフロ）で、洗面器を間違えて赤面した。忘れる事がおびただしい。全く困った事だ。どうなる事か」。

でも、もの忘れはまだよい。数年前のこと、何がそうさせたのかカッとなり、自分がバイクに乗るときかぶるヘルメットをつかむや否や、いきなり、まだ幼なかった子どもの顔めがけてしたたかなぐりつけたため、子どもはその場に気を失って昏倒。なぐったヘルメットが真二つ。「なぐられたところがよかったおかげで、大事にならずにすみました」、とは妻スミ子さんの述懐だが、子どもには何の罪もないというのに。

「何のためカッとなったのか、後でどげん考えて見てもわからんとですもんね」。村松さんは語るものの、彼が出して見せるヘルメットに、今も残る無残な傷痕が、村松さんのそのときのゆえなき爆発のすさまじかったこととともにさぞやそのいたいけな心をうちくだかれたに違いない子どもの悲しい思いを、そぞろしのばせる。

開かれた道

顔は白髪。歯は総入れ歯。一見初老の人を思わせるが、村松さんは昭和六年十一月二十日生まれだから、実はまだ四十四歳の男盛り。普通なら、いよいよこれからというところだ。

妻のスミ子さんは、夫と三つ違いで四十一歳。三井鉱山が許せないはずである。

まして子どもはといえば、今長男の進吾君が十四歳で中学二年。次男の公明君が十一歳で小学の五年生。父親の村松さんが被災したのは、進吾君がわずか三歳で、公明君は、スミ子さんが懐胎してからまだ四カ月というときだった。

「一人の子どもは手をひいて、もう一人の子どもはおなかに抱えながら、これからいったいどうなるのだろうかとの不安におびえ、病院と家の間をいったりきたりの暮らしでした」――スミ子さんの当時への悲痛な述懐。

翌る年の四月、公明君誕生。すると、こんどは、赤ん坊の公明君を背なかにくくりつけ、一方進吾君のもみじのような手をひきながらスミ子さんはCO闘争へ。鹿児島県に近い熊本県下の片田舎から、炭鉱労働者の村松さんのもとへ嫁いできた身には、デモとは何のことなのか、それさえわからなかったスミ子さんではあったが、自分の前に開かれたのはもうたたかいの道しかないことを、知らなければならなかったのである。

とにかく食うために一時自衛隊にはいったこともある。

でもそこでは、特に無線の暗号手・通信手に選ばれたほどだった。だから、被災後心ない医師からバカにされたとき、「何をいうか。今でもモールス信号ぐらい覚えとっどゾ」、とくってかかったこともある。

器用さも格別。今社宅の家のなかに掲げられている額の額縁や、メジロがさえずっている精巧な鳥籠などは、すべて村松さんの手製。かって身につけた手仕事が、そこではほどよいリハビリテーションにもなっているわけだが…。

証しの言葉

こんどCO患者＝村松さんのことをこの欄で伝える準備をすすめていると知ると、彼は自分の悲しい思いをたどたどしい文字で書き綴った、一枚のレターペーパーを寄せてきた。

表面、子供に向かって呼びかけられた文章。だが行間に、いや言葉の奥には、深い悲しみとともに自分に対して二度ととり返しのつかない危害を加え、自分と妻とが強く結ばれながら今後も歩きつづけてゆかなければならない、かけがえのない人生を、非道に奪い取った三井資本に対する抗議の炎がかっかと燃えている。

彼が書きしるした言葉というのは――

「私は、自分の体力や能力をことさら誇張したり、良く見せたりしたいとは毛頭考えていない。しかしCO患者となったため、何事も他人のように思うようにならない現在、せめてCO患者となる以前は人なみの人間であった事だけは、自分自身も信じたいし、また二人の子供にも知ってもらいたい。二人の子供は、CO患者となった今の私しか知らないから。

やがて子供たちが一人前の労働者として世に出る時、CO中毒の恐ろしさ、苦しさを、少しでも多く理解して、自分の父親は、せめて他人から笑われるような人間ではなかったのだ、と理解してくれるため、この言葉を新聞〝みいけ〟にのせてもらって証（あか）しとしたいのです」。

何をいうか

村松さん自身自負するように、彼はもともと人後に落ちる人ではなかった。むしろ、群を抜く人間だった。

働き手でもあって、坑内で働く身でありながら、「一カ月に、七十二日分働いた経験さえある」（村松さんの話）。

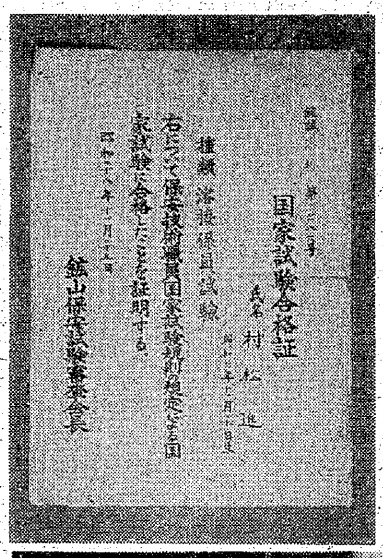
彼はもの心ついた頃は、もう筑前の炭鉱で働いていた。新目尾（シンシャカノオ）炭鉱で働いていたときの記憶によると、山の中腹から斜坑となって降りてゆくところに坑底が展開していたというが、炭丈（スミタケ）は三尺ならよい方で、一尺層～二尺層がほとんどだったという。

そんなヤマを幾つか歩いた後、三井資本に対する抗議の炎がかっかと燃えている。

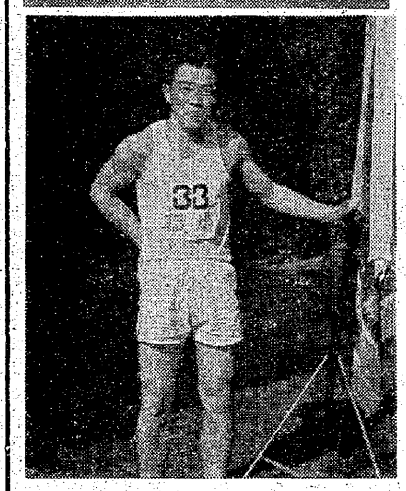
彼が書きしるした言葉というのは――

「私は、自分の体力や能力をことさら誇張したり、良く見せたりしたいとは毛頭考えていない。しかしCO患者となったため、何事も他人のように思うようにならない現在、せめてCO患者となる以前は人なみの人間であった事だけは、自分自身も信じたいし、また二人の子供にも知ってもらいたい。二人の子供は、CO患者となった今の私しか知らないから。

やがて子供たちが一人前の労働者として世に出る時、CO中毒の恐ろしさ、苦しさを、少しでも多く理解して、自分の父親は、せめて他人から笑われるような人間ではなかったのだ、と理解してくれるため、この言葉を新聞〝みいけ〟にのせてもらって証（あか）しとしたいのです」。



左は溶接の国家試験に見ごと合格した証書



駅伝の選手として走り、転場分会に優勝をもたらしたこともある。

お知らせ

今号は三池大災害抗議大集会の後のことで、大分積み残しができました。

かんじんの「原告団消息」をはじめ、片桐政子さんの短歌の近詠「父の死」と題した、遺児＝広沢道子さんの手記、などです。

それに、七日夜の大裁害裁判講演会での、藤本正弁護士の講演の要旨も種み残しとなりました。

次号に掲載することにしますので、おゆるし下さい。

編集部